

スイスに好意を表し、之れを譲與致したので、スイスとサルヴェニアとの二箇國で湖の沿岸地を有つていましたのが、イタリア戰役の結果と致しまして、イタリヤからサボヤの地をフランスに譲りましたにつき、もとのサルヴェニア領の沿岸地は改めてフランスの領分となり、したので、今ではスイスとフランスとの二箇國が此の湖を分領致して居ります。比較的、小さい湖の水面をかほどまてに、堂々たる國々が争ひまして、僅ばかりの沿岸線をかち取るなどいふことより見ますれば、交通の便利なる湖は實に有益なるものでありまして、深く注意せねばならぬと思ひます。

沼は思ひの外用ひ方の少ないものであり、まして、通常防備の側に於て使用せられて、少なからぬ利益となることがあり、沼の産物としては、多少の川海老とか小魚とか、藻とかいふもの、收穫はござりませうが、それ等は中々少なひ額のものであり、まして、別に取り立て、言ふ程の價值もござりませぬが、併し國家の上より見ますると、沼は天然の防備點となし得べきものであり、殊に要害の前面などにあり、する沼は、自然の大なる外障となるのであり、する例は、ロシアのソフ

ゴロドは、嘗て盛大なる共和國であり、まして、立派なる商業國となつて居りましたが、イルメン湖と申します大湖の北側にあり、まして、周圍が沼と森とでありましたので、敵軍が接近するものが出来ませぬで、其自然の防備により、幸にも元のために攻め取られませぬで、其國の祀を持續するものが出来したのは、此の沼が防備用として、著しく役に立ちました實例であります。

第四編 各論

山

山には鎖のやうに長く續いて延びました山脈と申すのがあり、ごちや、く、にかたまたつた山彙と申すのがあり、又高さによりまして山と申したり、岡と申したりする場合もあり、又高さの如何によらず特に山と申す場合も往々あります、が、何れに致しまして、二つの種類から成立つてをりまする、先づ地球の内部が冷えまして収縮しまする爲めに地の殻が振動を起しまして、其結果として凹凸が出来ます、即ち皺が出来ます、此皺なるものが世界の山の大部を占むるものであります。次には地球内部の熱の爲めに、内部の物質が溶けまして、地殻の薄弱なる處を破りまして、迸り出て、其溶けましたものが、地の上に嵩高くたまりまして高い地面を造りまする、即ち所謂火山性の山であります。水成に致しまして又火成に致しまして、何れに致しまして、山は海面より餘程高いものでありますして、山の間

は必ず多少の窪みがありまする、そこで山とか、岡とか、山地とか、岡地とか、高野とか、平野とか、申して種々な形を致してをりまするが、概して海面より多少高さ地面が出来て参りまする、現に世界の何地を見ましても、如何なる山國でも、山ばかりで、少しも平な處はないと申す様な地方はござりませぬ、尤も平な處即ち平野と申すものは、一概に海面より何程も高くないと申す様な低い地に限らぬとてありますして、世界の諸國には往々に海面より頗る高い平野がござりまする、之れを高さに由りて高野と申します。歴史に現はれて参りまする國々が如何なる場所に多く發展したかと思はするに、何れも皆山、岡、山地、岡地、高野、平野等の錯雜して都合の良い配置にありまする地方にあります、餘りに山勝ちの地方でありますしては如何にも交通が不便でありまするし、通常の場合と致して、人口を養ふだけの物産もなく、逆も大きな社會の成立つとは六ヶ敷い、從て強固な國家の成立も覺束ない次第である、但し斯様な山地に國家の卵を置きまして其卵が漸次に成長致しまして山地以外の他の性質の地面を占領致しました場合は格別であります、つまり茲に申しまするのは、世界の表面に山地ばかりよりなる自然區域あるものを見ますれば斯様

を山地に有力なる國家が出来る筈がないと申し上げるのである。又平野のみより成立つ自然區域でありますと、物産は豊でありますも、亦人口もそれに伴うて増殖すると致しましても、何さま平野のみで他の性質の地面がありませんから防備の點に於て頗る不充份であります。絶えず四隣の自然區域の人民より侵略せられまして到底長く其國家を維持するとは出来ませぬのであるから斯様な場所に於ても有力なる國家の成立つとは六ヶ敷い譯である。故に上は申上げました通り、苟くも有力なる國家が成立ちまするには、必ず種々様々の性質の地面を然るべき配置に備へなければなりません。現に世界列國の領土を神覽になりましても實際其通りであるを御承知になりませう。是は古今東西に通じての原則でございます。さて山の自然區域は色々の性質を有する土地があるを見て、そこに如何にして人口の増殖するかと見まするに概して申しますれば、山地は人口が少なくて平野に人口が多くありまします。而して平野と申しても、餘りに其土地が低く過ぎましたら、其土地は濕氣が多くて従て空氣が新鮮でないと申すことになりまして、健康の上から非常に不都合である。かゝる土地に於ては熱を發する傳染病や風土

病が発生する例であります。思ふ様に生活が出来ませぬ。それで人々は多く土地高燥にして地味の宜しき、交通の便利なる場所を選んで居住致します。何國に参りましても人口の最も稠密なる處は何れも斯様な高過ぎず低過ぎずといふ岡地もしくは平野であります。海岸の濕氣多い土地とか、或は高野などには、餘り人口が殖えぬ例であります。例へばイタリアに於て人口の尤も稠密なる處は海面より一〇〇乃至三〇〇メートルの高い處であります。アメリカ合衆國にては其人口の三割八分までは海面を抜ぐ五〇〇乃至一〇〇〇尺の處に居住致して居ります。

以上申上げました處は普通の場合であります。勿論例外はあります。自然區域に沙漠が多くて、其沙漠の中に山地があるものと致しますれば、雨や雪や山に落ちまして沙漠には落ちませぬから水のあるのは専ら山地に限ることになります。かゝる場合には人口は勿論山地に繁殖致します。つまり山地より外に居住する場所のない自然區域であるが爲めなのです。又山に圍まれました廣い高野を有する自然區域でありますと、周圍の山地は水も宜しうございまして、交通の便

も割合に宜しいですが廣い面積である高野は何分地味が瘠せて、農業さへも思ふ様に出來兼ねるで、かゝる自然區域に於ては、廣い面積を有する高野は却て人口少なくて、其周圍の狭い山地に人々が集まつて参ります。つまり居住するに尤も適する場所が山地に多いからなのである。例へばアフリカの内地に於て人口の最も多いのは山地であります。又ロシア領中アジアのフルガナは三面に沙漠を帯びました山地であります。が昔より有名な地方でありまして、今も此方面に於ては割に盛な處であります。又チベットは大體よりして申しましたれば自然區域全體が高野であります。が併し其間に多少凹凸がありまして人口の比較的稠密な處は低い谷合ひの所であります。此谷合ひより北に上りますれば彼のカラコルムより崑崙に連なります。非常な高野であります。が何分餘り高過ぎまして、空氣は稀薄であります。土地には何の植物も産ぜないと申すやうな所でありまして、此邊は人間はいさ苦しくて歩くことさへ思ふやうに出來兼ねると申す次第である。今申しましたチベットの例とは比較にもなりません。が小アジア半島も海岸に山を繞らしまし

て内地は一圓の高野であります。人々は重に海岸の山地に集りて内地の高野には極めて少うござります。

自然區域の緯度によりまして氣候が大に違ひます。緯度が極の方に近づきまするに従ひまして漸次に氣候が寒くなります。又赤道に近づくに従つて漸次に暖かくなります。我等は寒暖其中を得たる國に居住して居ります。又歴史に現はれまする國々は何れも同じく暖帯方面に起りました。とて、普通には極に近いとか、赤道に近いとかいふ國々のとをあまり考へぬ例ですが、茲には合せて斯かる位置にある自然區域のとも申さねばなりません。暖帯にありまする自然區域の場合に於て尤も人口の増殖するに適當する場所と同一の性質の場所でありまして、其土地が極に近いとか、又赤道に近いとか申すことになります。と、氣候の爲めに頗る事情を變へて参ることになります。緯度が極に近くに從ひまして雪線が漸々に低くなつて参り、極に近く事が甚だしくなります。と雪線は海面に下ることになります。次第である。極に近くに從ひまして、人口の増殖するに適當する場所は段々海面並に近かねばなりません。手近ひ話が暖帯の地方に於きましては、餘程

高い山の上に於て見受けまする處の氣候上の事情が極に近い處に於きましては海面よりさつぱり高くありませぬ、平野に現はれまする、斯様な暖帯地方の高山の頂には苔より外の植物を産じませぬが、極に近い處に行きますると平野も又苔より外の植物を産じませぬ、即ち極に近い處の平野は、暖帯の高山の頂と同様であるのです、勿論かゝる場所に人口が成立する筈がありませぬ。又緯度が赤道に近くに從て、雪線は益々海面並より高くなります、從て人口が増殖するに適當したる場所は段々海面を抜く度合が増す譯になります、故に今概括して申し上げますと、人口の増殖に最も適する場所は氣候の如何によりて海面を抜く度合を異にせねばなりません、是は原則と致して申上げるのですが、勿論除外例がないてはありませぬ、例へば今茲に北緯度にある南北數百里に亘る大平野があると致しまして、而して此數百里の間に東西に連なる山脈が一本もないと見ますると此の數百里の大平野を南から來る暖風も北より來る寒風も等しく吹き通しに通して行きます、左様致しますると、南北數百里に亘るに係らず風の向き次第で其平野の全體が時には暖かになつたり、又寒くなつたり致しまする道理である、そこでつまり緯度の如何

によらず、地味さへ許しまするならば、何處にても人口は増殖し得る道理であります、尤もかゝる土地では盛んに人口の増殖することはあります、まひが平均の低い程度に於て増殖するのです、兎に角或る程度までは、べつに南北を通じて増殖する譯で、ロシアは現に此の實例であります、併しかやうな自然區域は世界に何個所もありませぬから全くの例外であります。

麓

麓と申しまするのは、山と平野との境を申す語トビでありまするが、之れを歴史地理學上の意味合ひよりして申しますれば、山國に遣入る入口であります。山國は總て一括して考へねばならぬものでありまして、其山間の一の豁合とか、一の高野とか、或は一の峯とか申しては、らくにしては何の意味もないので、峠なり、豁なり、高野なりが、然るべき位置に配置されて互に持合て一の纏りたる勢力をなすものでありまして、是等を一括して、どれだけの價値があるかといふことが定まるのであります、申さば一の要塞地と同じやうなものであります。要塞地の場合に

おきましては、何れ數多の要塞を以て防備致すするが、是等の要塞は個々で各々完全なる働きは出来ませぬので、數多の要塞が協同に働くものと見て始めて完全なる防備線をなすのであります。併し乍ら如何に堅固な要塞でも其内には弱い地點がありませうて、斯様な弱い地點よりして破れるのであります。山も之と丁度似たものでありまして、山中に進入すると致しまして、何處からも登口のないと申すやうな山は、迎もないので、精々探しますれば、何處かに破り通ることの出来る點があります。斯様な山の入口は非常に重大の意味合ひを有つのであります。山の中にあるにありませうる國が成立つか成立たぬかといふとは、一に斯様な入口を持ちされるか、持ちされぬかに依て決します。斯様な平野と山との境の地は、其性質に於て餘程風變りのものであります。平野は概して申さば、産物も豊かであります。人口も多いことであるのに、山の入口の處はやはり山地の性質を有つて、申すので、物産も少く人口も薄くあります。申さば、比重の重ひ鹽水と、輕ひ淡水との接觸點と申すべき處でありまして、並の場所ではないのであります。最も山地と申しましても、色々でありまして、甚しいごちくごちくの岩だらけで森さへもろく

にないと思はれ、申す様な山地もあるし、又左様かと思へば比較的になだらかな山でありまして、其上の山中に鑛脈が深山あるといふこともありませう。いま申上げるやうにも、山地がなだらかからず、森もあり、鑛脈もあるといふことならば、實際の平野と甚しい違ひはないので、山地でも人口が随分成立ちまして、農産物などは餘り多くあります。其かは、牧畜より上る物産が充分ござりませう。つまり、斯様な土地ならば、經濟上、平野と異なることではないのでござります。さればこそ、イタリアの實例を御覽になると、直ぐ判ることですが、イタリアの古代史を御覽になりますと、平野に於ては、さまでのこともありません。却て、山地に於て國家が發展してをります。中部に於て大に伸びましたラチニ種族も、南部に於て頗る伸びましたサムニテ種族も、皆山地に居住致して居りました。此のイタリアの山地は、海面を抜ぐこと、左程高くない處でありまして、麓の平野は、兎角に沼や澤が多くて、その爲め風土病が流行して困るのに、斯様な山地は、熱病の思ひなく、比較的、健康であります。人口が増殖致しましたこと、別に、經濟上重要な地點であつたといふ譯ではありませぬ。

併し山地と申しますれば、概して多少交通の不便な處であります。此の交通の不便といふ點からして内部の人口が自然に増殖するより他には、外部より移住するものが多くなるといふことは餘程覺束ないのであります。尤も山地には何處にか適入口があります。此の適入口が破るれば多少外部より移住することは勿論のこと、種々の實例によりまして此事柄は明白であります。二三の例を申せば、ノルウェー國は全國山であります。非常な岩山ばかりでありまして、其の山林から材木を切出すことを以て有名であるし、其上又鑛山もござります。山の合間には僅かに農業も成立つてをります。彼の大なるノルウェーが、まゝ山であつて見ますれば、何れこの山國へは這入る道筋が何本もある筈、又實際澤山ござります。ノルウェーの海岸には、フイオールドと申して非常に深く内地に這入て居ります。入江のやうなものがあります。是は皆地質時代の氷河が穿ちました廣大なる溝であります。今日の姿で見ますれば、ノルウェーの内地に這入るに最も都合よき天然の道路となつてをります。フイオールドによりまして、外部より移住致したものがあります。即ちノルウェーの隣に居りますラップ種族であります。が大分移

住して居ります。又中アジアのバミルと申す高野は土地のものが世界の屋根と申す程甚しい高い原でありまして、その頂は年中雪や氷が溶けませぬて一切の動植物は繁殖致させぬ、只其の腹より裾にかけまして、聊か草が生ずるのであるが、こんなひどい處まで彼のキルギスと申すトルコ種族が移住致してをります。是等は至極悪い住みにくい土地でありまして、其土地には殆んど何等の産物なきに係らず強て移住するほどの奴です。から然るべき發展をなすべき社會を成して居らぬのです。又斯様なものらでなければ、かゝる土地に移住する譯はないのです。併しもしかやうな山地でも其麓のまはりには然るべき豊饒の平野がありまして、從てそこに相應に人口が繁殖して居りますれば、自然その山地は麓の平野を壓ふる要塞の用を辨じます。もし山がさほど岩ばかりの山でありませぬて多少なだらからかて又多少の物産を出すならば、なほさら要塞の用を辨ずるに都合が良いのである。甚しい岩山は容易に這入られませぬから、防ぐに便利ではあります。が、土地に居住すると致しても、物産はなし、農業は出來ず、時によると牧畜も覺束なくて生活が出來ませぬから、此山地を要塞と心得ていまして、も籠つて居るに至極困難である。之

に反して、同じ山でも多少なだらかで物産もあり多少農業も出来るし、牧畜も出来るならば、山を要塞と見て其中に立籠て居るに容易であります。かやうな要塞の用を辨ずる山の麓にある平野は、どう致しても山に居るものゝ爲めに占領せられて、其人口の爲めに財源となるの不幸の地位に在るのであります。かやうな平野の住民は何程奮發して自衛の道を講じてゐても、何分地の利を失うてをるのですから、早かれ晩かれ山地の住民に壓へ付けられてしまひます。獨り地の利の上よりのみならず、又氣候なり、生活の摸様なりの上より致してもかくの如き場合にあきましては、山の住地は常に荒き風に當てつけられてをるし、まづ、いものを食て激しい働には慣れてをるので、従て自然に軍隊の好材料となりまするが、麓の平野の住民は、氣候も比較的宜く、荒き風に吹かるゝことも少なく、食物とても豊て、それに働くにも左程苦しまぬと申すやうなことですから、如何に奮發しても、逆も山の住民と同じ戦闘力ある軍隊をよう造りませぬ、されば人の性質の上より致しましても山の住民に制せらるゝとは免れぬのであります。例へばスウイスの根據地は山でありますが、此山より段々麓に伸びてまゐつたのであります。モンテ

ネグロもやはり、根據地は山でありまして、麓をさして下りながら伸びました。現在インドの内て唯一の獨立國であります。ネパールなどもヒマラヤの山中に籠つて居るので、此山より麓へと出て僅かに其國を維持してをるのであります。此の事は何處の國にまゐりましても、古今に亘りて澤山に實例のあることである。

山と平野との境にありまする地は、例へば海岸と、其性質が似て居ります。即ち交通の至て便利なところと、不便な處との境であります。又海よりして河やら入江やらを利用致しまして内地に入ると同じく、平野よりして河やら湖やらを溯りまして山に這入ることが出来ます。されば斯様な自然の交通線を利用致しまして、平野よりして色々の方角へ向て山地に這入らうとつとめますことである。山の住民は是非平野より入り来るものを逐ひ出して、自分から平野へ向て打て出ぬければなりません。そこで山を自然區域として立つて居る國は必ず國內に數多の交通線を造つて居ること、非常な無理を致さぬ限りは何とか工夫を致して麓を上り、山の割りに低い處を越へ、又谷川を下りて山道を付けることとあります。平野と違ひまして、なに樣道を作るには面倒であるが、幸にかゝる山地には必ず谷川があり

まするで其の水流を標準として進めば必ず何處かに出らるゝに相違ありませぬ、
 ですからさ程文化が進んでをらぬ國に於ても山道は開けます、現に彼のヒマラ
 ヤの甚い大山脈の中にも澤山な峠越があります勿論皆ひどい峠越でありまし
 て逆も普通の峠越とは比較にはなりませぬが兎に角ヒマラヤの鞍部を越へてを
 るのである。又アルプの山間にはローマ人より以前の時代に於きまして、澤山な
 峠越がありましたこと、フランスの南海岸とスウイスの内の最も僻遠な處との聯
 絡も餘程古くより成立つていた證據があります。斯様な次第でありまするで
 山の居住民は必ず數多の交通線を造てをりまして、外部に出て、自分等の用を辨
 じてをります、併し山の住民は、どうせ平野の住民に比べますると實力に於て到
 底及びぬ例で、平野よりまゐりまする處の移住民が甚だ強固な根據地を有つてゐ
 て、其れより絶へず援を得て山に行くならば山の住民は如何に奮勵致ししても
 逆も永く獨立し兼ねる實例になつてをります、例へばアルプの山間に居りまし
 たレーナなどは今のオーストリア領なるチロールよりスウイスのウリに至るまで
 高山峻嶺の間に一圓に居住致して牧畜によりて生活を營み至極勇武の人民であ

りましたが、麓より自然の峠越を踏みて攻上りましたロトマ人にも負けたりし後に
 はゲルマニ種族にも負けました、本邦の球摩の熊襲や雄勝の蝦夷が皇化を被りま
 したのも同一の例であります。

谷 道

谷と申しまするのは、山と山との間、即ちたか、かみの間にありまするくぼみ、のどとて
 ありまして、もとより甚だ小さなものも甚だ大きなものもあります。もしたか、かみが
 大陸的の大山脈でありますると、其間にある谷も從て大陸的の平野となります、之
 れに反してたか、かみ、がもし小な岡嶺でありまするならば、谷間は僅かに幅數丁に過
 ぎぬといふやうな小なものになつてしまひます。我等がこゝに谷と申しますの
 は兩者を込めて申すので、原始國家であるとか、最も出はなにある植民地であるとか、
 又は豪族の根據地となりまする新開墾地であるとか申すものは多く此の小い
 谷に發展致しますること、歴史に著い大國家が斯様な小い谷間より生ひ立ちま
 したことがござりまする。もし谷が大陸的でありまして面積が廣大であります

ると、何様かやうな谷より原始國家は出ませぬが、そのかはり種々の變遷を経て遂に大國が茲に起る例であります。何様谷は山地に比べますれば平野でありまするで何う致しましても、わりに地味も宜しいし、氣候も好し従て人口も段々集つてまゐるし、物産も漸々多くなつてまゐるし、交通は申すまでもなく至極便利なことでありまするで、社會はとりあへずかやうな處に發展致す譯であります、幸にして四隣に強大な國家がありませぬと、至極好都合に成長しますが、不幸にして近邊に堅牢な根據地を有つて居る敵國がありますると、大抵之れに呑まると、實例になつて居りまする。既に一寸お話をいたしました攝津の國多田川の谷、紀伊の國有田川の谷などは、大邦に於きまして有名なる豪族の根據地でありまするが、何れもたかみを以て圍れまして自然の運入口は僅かに一箇所より外ありませぬ、尤も堅固なる場所でありまして、谷間の土地も宜しいし、物産も多いことであるし、かかゝ、わりに多くの人口を養ふに足りませざるで、豪族の起る根據地となつたことでありまする。今少し大い實例を求めますならば、シナ帝國は何處に起て居るかと思はするに、黃河の中流の谷に起つて居りまする、又此帝國を起しました漢人種

と接觸いたして頗る頑強に抵抗したる蠻人種は今日迄も貴州の山奥、沅江の水源地に居りまするが、もとはヤンツキアン中流の谷に居りました。又インドの最も先きに開けました部分は何處かと思はするに、インドス河とガンガ河との谷でありまする、但しインドス河の谷が先きに伸びまして、それより河傳ひにガンガ河の方へ進てまゐつたことでありまして、餘のインドの大半島は漸々年代が下りまして發展致したことである。世界最古の國家といたすエジプトも申す迄もないが、ニール河の谷でありますし、パピロニア、アッシリアの起りましたのもチグリス河の谷でありまする。かやうに御覽になりますると、谷と申す性質の地方は大國家を出すに屈強の場所でありまして、殊に古代に於て著しく然るとが、お判りになりませう。又中世に於ても左様でありまして、前に申しました通り、ロシア帝國は最も先きに何處に伸びたか申せば、彼のネバ河、ラドガ湖などのありまする谷に起てをりまして、少し後になりまして、ドニエブルの谷に移りました、ポーランドの起りましたのも之れと同様なことで、最も古くはワルタ川の谷に現はれまして、續ては、ウィスツラ河上流の谷に頭を擧げ、年代が段々下りましては、此谷を川傳ひに川下へと

下つてまゐりましたただけであります。

上に申上げました處は大なる國家が出来ました先例でありますが、場合によりますると、小い谷に小い國家が起りましたして昔も今も更に大きくならぬでもとのまゝに現存してゐるのがござりまする。尤も是等は世界的の國家としては何等の價値も無いのですが、歴史地理の上より見れば頗る深い興味の有る實例であります。此類の國家の實例として引きまして宜いのはボヘミアであります。ボヘミアは今より六百年前に其勢力を失ひまして、今日ではもはや獨立國ではないのでオーストリアの一國であります。もととはやはり谷より出てました國であります。テューと申すスラブ種族が、モルダバと申す川の谷に土着致しまして、それより造り出した國であります。此のボヘミアは大體に於て菱^{ロシヤ}形でありまするが、四面皆山脈か高原かであります。つまり摺鉢の底に當る處にモルダバの川がありまして、其谷に國家を起したのであります。それで此の谷を根據地と致しまして、それより東南の高原を越えましてドナウ河の谷を下つてまゐりまして、今のオーストリアの平野を領土と致して居つたこととあります。又スウヰス共和國をな

す諸州は、もとゞ昔獨立國であります。申す迄もなく至て小いが、小くても何ても兎に角獨立國でありまして、小いものがまゝとまりて共和國をなして居るので、此内グラウビンデンと申すのが一番大い州であります。是れは數多の自治體でありました小い谷間の聯合より成立してをりまする。かくの通り割に面積が大いのであります。つまりスウヰス共和國をなす諸州は何れも皆アルプ山麓の間にあります。皆谷であります。たゞ谷か稍大い場合と小い場合との差別がある計りてあります。例へば至て小いグラルスはリントと申す山川の谷であります。又シウツはもとムオタと申す小い川の谷より起りました。他の州も此の例であります。てバレーと申す州はロース河上流の谷全體を有つて居ります。割に大うござります。併し谷の幅が甚だ狭いから、先づ帯の如くに長いと申すだけです。

谷は斯様に國家が成立致しまするに都合のよい場所となるのですが、又國家が發展致すにつきて其領土を擴張致す時に頗る便宜を與ふる場合がござります。如何なる山麓山脈でありまして、多少必ず谷のあるもので此の谷を傳つて行きますると山麓なり山脈なりを割に易く乗越すことが出来まする。所謂峠

とか越とか申すものはかく致しまして踏み越えをする高い地點を申すことであるが、かやうに致しまして一の自然區域より他の區域に乘越すことが出来ず、即ち二つの自然區域を聯絡致しますところの線となります。彼のヒマラヤの如き大山脈でも葱嶺の如き大山脈でも乗越すには勿論非常に苦しいとはありまするが兎に角谷から谷へと上て行きますと越せぬことはありませぬ。天山もやはり一圓に非常に高く越えたい大山脈であります。是れも頂上に於て氷河を踏んで通る覺悟さへあれば谷を傳て上りますれば、越えられるのです。ましてそれより以下の低い山嶽山脈に至りましては、谷傳ひに乘越すことは容易なことであります。例へばイタリアの半島にはアペニンと申す脊髄山脈がありまして、イタリアがこの麓に東西の二部に分れてをります。即ち東西の兩自然區域に割れてをるのである。然るにローマ人は早くより此兩自然區域を乘越ゆる工夫を致しまして、存外早く全半島を領土と致しました。それは如何にしたかと申しますれば、ローマの起りました根據地はチベルと申す川が平野に出やうと致します。出口の谷であります。此チベルと申す河はアドリア海を距ること僅かに十二里の

山の中に水源を發しまして、それよりアペニンの山の間をあらちらと大體に南の方角を取りまして、下つてまゐるのであります。谷が三度になつてをります。ローマ人は此川が平野に落ちます出口に居るのであります。此の出口より上へ上へと三段をへまして順ぐりに上りまして、やがては峠を越えてアドリア海の方面のフノベサロ、リミニと濱づたひに北へ進んで遂にポー河の盆地即ち谷全體を占領致しましたのであります。又イギリスは近年チトラル、スワトと申して、インドの北境にあります。高い谷合を大層大切な場所と致してをります。是は尤も山の中ではあるが甚だ豊饒の土地であります。昔より開けてをるところであります。但しイギリスは谷が如何に豊饒な土地でありまして、又如何に昔より開けて居ても、單にそれだけの理由で、此谷を大切に致してをるのではありませぬ。此所がイギリスに取りて大事なる譯は、中アジア方面よりアフガニスタンの山嶽を越えましてインドに南下せうと致します者が、常例のアフガニスタン街道を通りませぬ。却てパミルの高野に上りまして、パミルの高野より非常な山越てはあるが、兎に角高い山を越えて、此のチトラル、スワトの谷を下つてまゐり

ますると、丁度裏道の姿になりまして、存外樂にインドに南下することが出来るやうになつてをります。申さばインドに這入る間道になつてをりますので、それでイギリスが心配致しまして、やかましく申して居るのであります。此等の實例をお考になりまして、山の間と申すものは軍事上から申しましても、容易ならざる大切なものであることを御承知になりませうと思ひます。

前に山のことを申上りました時分に申したことであるが、山の中に往々平野があることであります。かやうな平野はやはり谷と申して宜しいのです。其譯は山に落ちる谷川の水を取纏めまして、比較的に水量の多い谷川の流るゝ處は、山も通常餘程遠方へ立離れまして、山國の割には幅の廣い谷合を造るとであります。かやうに割合に廣い谷合は、其物自身からいへば、勿論山の中の平野であります。全體よりして申すならば、やはり谷と申さねばなりません。斯様な谷の地は存外早く開くる例でありまして、其實例は随分多くございます。本邦の陸前の北方より陸中にかけて、彼の北上川の長い谷があります。此の谷は一の關の南に於て甚だ廣くなりますが、それより北に於ては漸次に狭まりました。所々に、豊饒なる

平野をなしてをります。陸中の國の最も早く開けたる場所は此の谷であります。又安倍家が繁昌致しましたのも、此の谷に據りましたからのこととあります。岩代國の福島、平野も割に大い平野であります。が、やはり阿武隈川の谷の廣がりてあります。岩代の國の最も重要な部分、此所であり、此所はもと卑湿地でありました爲めに、發展は比較的遅うございます。ヨーロッパにおきまして、ローヌの河がレマン湖に落ちるところは、山の間であります。けれども、割に幅が廣くて、大ベルナルド越を經まして、イタリアに出ます。口もとに當てをります。取分け重大であります。又グラウビンデンの都クールは、比較的大い山麓の平野にあります。が、やはりラインの諸水源川がまとまりまして、山から落ちて、落ちる落寄口に當て居りました。是だけの點より見ましても、重大であるのに、尙ほスプリング、ユリアなどの峠を越えまして、イタリアに下ります。峠越の登口であります。それ故、重ね／＼重大の位置でなりまして、昔より今に至ります。又近頃マケドニアの叛亂と申しまして、新聞紙に屢々出ます。やかましい事件があるが、

此叛亂の根據地となつて居る處はモナスチルと申してマケドニアの山の中では
 わりに幅が廣い平野を控へてをりまする市であります。マケドニアは全部山で
 ありまするが、此のモナスチルのありまする處即ちワルダル河の支流カラスと申
 す川の谷、是れが此の山の中の最も大い平野でありまして、實にマケドニアの中心
 點をなしてをりまする。さればこそマケドニア全體を動かす原動力を此所より出
 すのであります。

谷には又、迫おとがでありまする。こと申すのは、假りに谷が南北に延びて居るものと
 見ますならば、東西に山の中に切れこんでをる處を申すのである。長さか幅かに
 於て大いのを谷と致しまするので、迫と申せば自然必ずなりに狭い谷となりま
 す。されば迫は自然後れて發展致しまする例でありまして、先づ谷が十分伸びま
 した後に、始めて迫に人口が出来てまゐる次第であります。是れは實例を挙げ
 る迄もなく、何處の國に於ても著明のとであります。又歴史上特に重大なる迫が
 有つたとは少うございませうから、取立て、申上る程のことも無いやうであります
 るが、例外のことがないでもありませぬ。即ちイタリアの北境のアルプの山中にア、

ダと申す川がりましたして、其上流は東より西に向て流れてコモと申す山水の秀麗
 なるを以て鳴つてをりまする湖に落ちます。此のアツダの谷はパールナリナと申
 まして、北イタリアよりオーストリアのチロール國へ遣入りまする重要な間道
 に當てをりましたして、又有名なる葡萄の産地であります。此のパールナリナの谷を
 縦の谷と見まするならば、之に對して横の谷即ち迫となるべき小い谷があります。
 やはり谷川が一本流れてをりましたして、コモの湖に落ちますが、此迫の奥にキアベン
 ナと申す名高いアルプの峠越の南よりの登口があります。此所より北へ向て上
 りますればスブリッゲン越であります。約を東へ向て上りますればマロヤ峠と
 申しまして、アルプの峠越の中最も低く最も越え易い峠に出まして、それよりイン
 河の水源地であります。エンガデンの谷へ出ます。此の谷はグラッピンデンの名
 高い谷であります。が此所を下りますればチロール國に遣入りまするし、又此の
 エンガデンの谷を横に切りまして北へ上りますれば、ユリア、アルブラなどの峠越
 を經まして北の方のクールに下ります。かやうな位置にありまするキアベンナで
 ありまするで、古來甚だ重い場所として、歴史に現はれて居ります。之れなどが迫

の最も著しいものでございませう。

峠越

峠越と申しますのは甲のくぼみより乙のくぼみへ出まするときに、その間の高みを飛越えさせる爲にこしらへてある、聯絡の道筋のことであつて、我邦に於て用ひまする意味では、山一つ越します場合には、之を峠といひ、幾つかの山を續て越します場合には、之を越と申すのであります。依て此二つの性質のものを合せて峠越と申します。峠越は歴史地理の上に於て重要なことは、一寸上に申したることによつても明かでありますが、更に改めてその重大なることを説明せねばなりません。世界の各地方に於て甲の地方より乙の地方へ出ますのに、たゞ道が一本しかないと申す場合が少くありません。一寸お考になると、異様なことを申すやうにお聞取になるかも知れませぬが、實際決してさうでなくてかやうな重要な峠越は、歴史に現れてまゐる例であります。其最も有名なる實例の二三を挙げますれば、バルカン半島の北部より、ヤリシアへ通入するには、只の一本道しかありません。

之は彼の有名なるテルモビレといふ嶺道であります。テルモビレの地形は、昔は今とひどく違つてをりましたので、今は地震の作用や、谷川が土砂をはきまじした結果として、なだらかなる嶺道となりましたことであるが、古い記録によれば、海岸に沿つて山が屏風のやうに聳へてをりました。嶺の方は崖になつてをる、そこを漢傳ひに人工を以て道をきりひらきましたものでありまして、處々に温泉が出てますから、其水が道に溢れて湯垢を残しますので、さもなくとも危い道が滑かになりまして、中々危険な道で有つたやうである。其上北の遺入口も、南の遺入口も、甚だ幅が狭くて、内が廣いやうな姿である。南北の遺入口は、即ち關の姿をなしてをつたものと見へます。テルモビレと申すのは、温泉關の意味であります。此所に温泉が湧出で、南北の遺入口が關になつてをるから、此名を得たものと思はれます。今は昔の姿をまるで失うて、山麓より海岸まで大凡半道もあるなだらかな嶺道で、とんと景勝のない地ではあります。兎に角、テッサリアよりヤリシアの内陸へ通入て行くには、此道を除くは、今も昔も外に道はないのであります。又スカンデナウ、アの大半島は、中央の脊髄山脈によりて、スウェーデンとノルウェーとの二個國に割れ

てをりますが、此山脈には峠越が甚だ少いのであります。其少い峠越の内、ノルウェーのトロニエムとスウェーデンのオスナルズンドとを聯絡致しますイムトランド越と申すのがあります。これがスウェーデン、ノルウェー兩國を聯絡致します最も重要な峠越でありまして、昔はノルウェー方面よりスウェーデンの北部に此峠越を経て移民したこともあり、またスウェーデンの方よりノルウェーを攻むる目的を以てトロニエムを取らうとして、此峠越にて全軍が凍死だともあるし、近年になりますれば、此峠越の一番低い處に鐵道を通じてをります。又、中アジアよりインドに出でまする街道は、何れも皆アフガニスタン本部もしくは其領土を通過することであるが、其中にも特に今も昔も重要なものはハルバル越でありまして、シナ人は、黒嶺と申した道であり、今日は必ずしもハイバル越を通らずとも他に峠越は二三本ありますが、他の峠越は、甚く険しい道であるとか、或は甚い廻道とか申す次第で、之れも皆不便な道であります。それ故に、ハイバル越はやはり最重要なるインド入の街道であります。

峠越は、其重大なる場合に置きましては、其麓を領土としてをる國家に取りて最

も大切な場所であり、まするで、死力を盡して争ひまする例でありまして、出来得べくは、自分一手で峠越及び其兩麓を有つて居やうと勉めること、假りに言葉造て申しますならば、峠越國家と申して然るべき性質の國家が、往々にしてございませう。上に申しましたアフガニスタンは、即ち此峠越國家の好適例であります。又、中世の實例を申しますならば、スウエスのウリと申す州は、サンゴタルド越の北麓に起りましたもので、此峠越の北側にロオスと申す谷川が、段々に谷水を集めて、北の方へと落ちますが、北の谷に國家を起したので、それが、それに満足せしめぬで、後にはサンゴタルド峠の南、即ちイタリアの方へと下りまして、レベンチナと申す谷を下てまゐつて、遂に今日のチ、ノと申す州を領土としてをりました。谷より申すならば、ウリは、ロイス谷と、レベンチナ谷との二より成立てをりましたので、此二つの谷間の聯絡を付けまするものは、サンゴタルド峠でありました。即ち此峠全部を一手で握て居たことであり、明に峠越國家と申して宜いのである。又、オーストリア領のチロールと申す國は、全體が山國でありまして、アルプ山麓の高さが漸く減てまゐる東の部分と占てをつたこととあります。

が、此所にアデジエ上流の諸川が發し、其谷間をブレンネルと申す峠越によりて通過致します。此ブレンネル越全部をチロールが有て居りました。いやはしくも此峠越又は其間道を通らうと致しますれば必ずチロールを経ねばなりません。故に是も亦峠越國家であります。又、オボヤと申す有名な中世の國がありまして、其領土は時代によりて或は廣く、或は狭しと申すやうに色々になつてをりました。が今は滅びてフランス領となり、上サボアと、サボアとの二縣となつて其舊王室はイタリアに入て其王室となりましたが、此國はもとアルクと申すロース河の支川の一であるイセール川の水源川の谷に起りまして此谷とイタリアのピエモンテとを連絡致しまする彼有名なモンヌと越とフレジウ越との兩麓を有つてをりました。イセール川の谷はイタリアとフランスとを結付ける重要な道筋であります。其谷の上の方を有つてをりましたサボヤは山間の小國でありながら大切の位置を占めてをりました又そのピエモンテを領することができたのも二箇の峠越を抑へつけたからであります。

峠越國家は其峠越をあくまで利用して國家を維持する方針を取るものであり

まするで全力を峠越に注ぐことであります。由て場合によると峠越の通過税を徵集することがあります。恰も一の海峡を占有してをる國家が其海峡を通過する船舶に對して通過税を取ると同じ例であります。現にアフガニスタンのハイバル越などは、土地の領主に於きまして通過税を徵集致しましたこと。今のイギリスのインド政府は、一定の金額を年々此領主に支拂ひまして、此峠越を利用してをることでございます。中世紀の頃ウリが、シウツ、ウンタルワルデンと聯合致してスウ、ス共和国を起しましたのも、其原動力はサンゴタルド越の通過を監督する權利を有つてをったことに基いたことであります。

峠越は何れ山國に限つて存在するものであります。固より山の性質によりまして峠越の多い處も、少い處もあります。手近な例を申すならば、南アメリカのアンデスは頗る越惡い山脈でありまして、強て越えやうと致しまするならば道は幾本もあります。けれども、三千メートル以下の峠は全くございませぬので、近年アルヘンチナ共和國のメンドサより、チレ共和国のサンフェリペに出でます峠越は、ざつと富士山の高さであります。かやうに高い峠越に鐵道を架ければ、アルへ

ンチナの都ブエノスアイレスとチレの都サンチャゴとを聯絡することができませぬのであります。ヒマラヤを越す鐵道は未だできておませぬがもし他日できることがありますならば、やはり類似の困難をせねばなりません。勿論アンデスを越す位の困難は免れますまい。ロシア領中アジアよりシナの新疆省へはまだ鐵道が通ひませぬが、ロシアが計畫通り、アンデアンよりカシガルヘテレク越に鐵道を架けることが出来まするならば、かなり困難の事業ではあるが、勿論できぬことはありません。併しテレク越の外には鐵道を以て越へられる峠越は葱嶺の内にはござりませぬ。一々申上ぐる隙はないが、要するに鐵道を架けたり、或は大軍を行るに便利な峠越はそう澤山ないものであります。何處の山脈に於ても、山麓に於ても、大抵その場所はさまつてをります。かやうな割に越易い峠越に當てをりまする處は、早くより開けまするじ、また然るべき峠越の有りませぬ山國は、中々容易に開けませぬ例であります。かやうな容易に開けぬ性質である山國を通らなければ達し得られぬと申す自然區域は、其發展が甚だ後れます。今のオーストリアの山地で、山水が明媚であり、温泉が湧くので遊覽地なり、保養地なりとして

鳴つてをるサルツカンメルグート及其の附近は今日こそは山の中とは申せ岩鹽も出るし、牧畜も盛だし、田野も開けてをるし、鐵鑛もあるし、白堊も無盡蔵だし、温泉も湧くといふやうで、甚だ結構な處で、山水の點に於てはオーストリア全國中で、指を第一に屈する地方であります。先づ此國の公園と申して宜い處であるが、ローマ時代にはノリクムと申すなさない、殆んど無益のやうに思はれてをりました。州てあります。それと申すのが、イタリアより此所にまゐらうと致しますには、殆んど然るべき峠越がないからであります。今日もやはり左様で、東の方ウインより這入るか、西の方ミンヘンより這入るか、どつちかに致しませぬと旅人のまゐるに困る地方であります。南からまゐるには、尤も困難であるのです。

峠越の重要なことは前に申す通り、兩麓にありまする自然區域の如何によりてさまりまするので、もし自然區域の性質が變ることがありますと、峠越もやはり其價值を落します。手近い例を申すならば、ローマ極盛の時代にはアルプ山脈を越す峠越が五筋ありましたが、其内尤も重要でありましたのは、モンジネーブル越でありましたと思はれます。此峠越は今も寧ろ間道であります。而しまして

ローマ人は遂に知らずすみましたサンゴタルド越は、今日にては最重要なる峠越となつてをります。ローマ人がモンジ、ネーブル越をひどく尊く見ましたのは、北イタリアより南フランスに出ますに此峠越が最も便利でありましたからでありまして、南フランスの地はローマ人に取りて殆んどイタリア本國と同様に重要なものと致してをつたのである。又文化の進んでをりましたことに於ても、南フランスは決してイタリアに劣つてゐなかつたのである。かやうな事情でありましたのでローマ人が、今日では間道あしらいをされてをる峠越を大切にしたのでありました。又當時に於ては此の峠越及附近の地を有つてをつたコッチと申した部落が宛も中世のウリの如く立派な峠越國家を作つてをりました。後になりましてサンゴタルド越が最も重要視されたのは、此の峠越はドイツより奥南に進みてイタリアに出るに最も便利な峠越であるからのことと多くの資金を出して、スウイス、イタリア、ドイツが保護して鐵道を架け、また軍事上に於ても、非常に重大な峠越であります。スウイス國でも盛な防備を此峠に施してをります。又シナよりインドに出ます峠越が今も昔も三筋ありますが、そのうち昔最盛に用

ゐられましたのは、天山越でありまして、シナ人は之を峻山と申しました。之は天山のムズタン越のこととありまして、今もやはり用ゐられてをりますが、何様天山の南麓より先づイリの谷へ出ましてアレキサンデル山脈の北麓を回つてタシケント、サマルカンドといふやうに順々に南へアフガニスタンを經由する道でありまして、甚しき廻り道であります。従て今日は多く用ゐられませぬ。昔のシナ人が多く此道によりましたのは、イリの谷がシナ領でありまして、又アレキサンデル山脈の北麓の地、シナ人の所謂千泉の地でありまして、此所に人口が繁殖してゐまして、次ではタシケントの盛なる商賣地があり、更に有名なるサマルカンドがありまして、物資豊富で旅行に便利が有つたからのこととあらうと思はれます。今日は形勢が全く變り、尤も近い道を經由するのが利益であります。多くテレク越を使用するかと存じます。併しこれは古のシナ人はさばり用ゐませなんだ峠越と思はれます。

かやうな次第であります。古今に通じて其直打をもちきるか何うかと申すことは、一に其兩麓の自然區域が如何様に其形勢を變ずるかと申す點に由て決し

ます。

二二二

低地

低地と申しまするのは、文字の通り大體に於て海面を抜く高さが低い地方を申すのであります。地理學者の間に行はれまする低地といふのは、海面を抜くと三百メートル以下の大體に於きまして低い地方のこととあります。固より高低に於て多少の違ひはありまするし、又處によりましては現に海面よりも低い處さへあることもあります。大陸にはかやうな低地が廣くあらはれることと例へば、南アメリカノ東部オーストラリアの中央部アジアの北部ヨーロッパの東部などは世界に於て有名なる低地でありまして、其の面積も甚だ廣大であります。かやうな低地は何れも皆地質學の年代の間に出来ましたもので、或は廣大なる大洋が漸々に淺くなりまして遂に水が乾ききつて海の低が露出するやうになつた場合とか、或は凹凸の山地が久い間雨風の作用で遂に平しならされてしまつて平地になりましたものとか又は河か湖とかと多くありました地方に上流より漸々

に土砂が押し出だされてまゐつて、河筋なり湖の濱なりが段々高くなりまして遂には海の底までも埋めまして、一面に廣い平地をつくりましたといふやうな原因に依るのであります。此の内て地質學で申す年代の中に大洋が涸れまして、其の底を露出してをる分が尤も廣大なる面積を占めてゐます。即ちヨーロッパの東部の低地などは、此の例であります。從て地層が重なり合はれて内には岩鹽を含んでゐます、アジアの中央部の低地もやはり此の類ではありまするが、年代が至極新しくありますること、岩鹽は無いと承知致してをります。又、面積の上から申しますならば、甚だ小さいが、ヨーロッパの西方にも低地がありまして、河が排出致しまする土砂が海の底を埋めてつくりあげましたものであります。彼のフランスの北部より北の方へ海へ臨むネーデルラントと特に申す地方、ネーデルラントとは即ち低地の義であります。是れであります又イタリア北部の平野なども、むしろ是に屬するものといふべきであります。北ドイツの平野は、海水が涸れまして干上りました平野でありまして、河水の持出す土砂も幾分か手傳ひをしてをります。之は七八百年此方、彼ノバルト海の南部が百年間に數尺の割合で淺

くなつてまゐるので判ります。

上に申すやうな低地は申すまでもなく人民の運動に何等の阻害も加へませぬし、又地質に於きましても廣い面積の間至る處同様であります。物産もまた一様であると申す利益があり、旁々數多の人口を有する國民が自由自在に行動する便宜を與ふるものであります。歴史に徴して御覽になると、ヨーロッパの南方の平野は、大古の時代より今日迄絶えず色々の種族が入替り立替り移住致し、開墾致してをる處でありまして、變遷の甚いことは、恰も船舶が大洋を往來してをると同じやうに見受けられます。又規模は甚だ小いが、ネーデルラントと特に申さるゝヨーロッパ西部の低地も、大古よりして近代に至るまで、居民が度々變りまして、國家が屢々更迭したり、又隣國より屢々侵略を受けたり致してをります。かやうに低地は其性質と致しまして國民の發展に至大の便宜を與ふるかはりに、又之を守るにも困難であります。兎に角國民が相當に人口を有して、又其國家組織も相當に強固でありますならば、何うとか致しまして、此の低地を自然區域と致してもちきります。既にもちきることゝなりますれば、十分に低地の利益を收

めましり富を致します。富が成立致しますれば文化も進むのであります。中世に於て、ネーデルラントは商工業が盛でありまして、其文物に於ても頗る觀るべきものが有りましたことは、ヨーロッパの歴史に於て異彩を放つてをることとあります。北ドイツの平野もやはり類似の現象をあらはしてゐまして、ハンザ同盟と申す商工業地の同盟が此所に起りまして、十三世紀以來十六世紀に至るまで、富と文物とをドイツに於て占有致してをつたと申して、差支のないやうな姿でありました。ヨーロッパの平野に於ても、キエフが早く歴史に現はれまして、其の文物はロシア國史に於て著しい現象を出してをりました。申さばロシア全國を文化に導きました燈明臺となつてをります。

上に述べます通り、低地は人民の運動を妨ぐることの出来ぬ性質の自然區域であります。いかにも居住の人民が自分の自然區域を早く自覺致す例でありまして、行動は自由自在であるし、拓殖も氣樂だし、つまり國民の進歩が極めて容易であります。他の類の自然區域と違ひまして、低地の自然區域は早く居住民に使用せられました。又、低地の自然の性質と致しまして、自然の境界が

一寸見つかりませぬから、之れが見つかるとして用捨なくどしどし進むので幾何もなく自然の境に達する理^{理由}てあります。又、廣大なる低地に、多少違ひまする種族が居住致してをつた處が、何様自然の防備のない地方のことでありまするで、わりに早く種族が入交りまして一所になつてしまひまする例でありまするで、存外僅かの年數の間に雜種がなりたちます、而して雜種の人民が自分の雜種たるを忘れて、本來の畫一の國民であるかの如き觀念を有つてまゐります。現にロシア國民を御覽になると判りませうが、ロシア國民は勿論雜種であります。世界で最も廣大なる低地にをりまして、國內に世界の何れの國よりも數の多い種族をこめてをりまして、申さば人間の種類の陳列場であるかの如き外觀を存してをりますることであるが、存外早く融合致しまして、昔のスラブ、フィン、トルコの三種族が入交りまして、一のロスと申す國民となつて居ります。ドイツの平野に於きましても同じやうでありまして、本來のケルト、ゲルマニ、スラブ、リトワの四種族が、一所になつてしまひまして、今の北ドイツの國民を造てをります。北ドイツの國民の内でも、プロシアの居住民は殊に其著しい例であります。

低地の自然區域は、かやうに速かに進歩致す性質のものでありまするが、其變り、又自然區域を利用致しました後に、此所より他の自然區域を侵さうとするに困難であります。凡そ人間の性質と致して、困難の仕事に慣れてゐますものは、進歩は甚だのろいが、其のかはり何處までも伸びる性質を備へてをるものでありまするが、之に反して、たやすい仕事に慣れてをるものは、困難の仕事に容易に手をやら着けぬ事であります。困苦の間に育ちました人は、どう致しましても、意志も強し、忍耐力も強うござりまして、周囲の事情の許す限りに於て、自分で選みました事をやり通すこととありまするが、氣樂に育ちました人は、意志もさほど強くなし、忍耐力にも乏しくて、物事に飽き易いもので、到底大な仕事はようしませぬのが常例であります。固より、とりのけの場合にはありますが、此所には一般の原則として話すのであります。國民もやはり一個人より成立てをりまするからして、全く同一の性質を有つものでありまして、困苦の境遇に國家を維持して來ましたものは、困難に逢ひましても容易に屈しませぬで、遂には自分の仕事をやり遂げます。例へばロシア人が中アジアを經營致しましたのは、一通りや二通りの困難ではな

かつたのであります。百年程の間に遂にやりとげました。氣樂な境遇に育ちました國民例へだフランス人の如きは、存外忍耐力が少うござりまして、風土もかはり、本國との聯絡も困難なる他の大陸にまゐりまして大事業をようやりとげぬものであります。現にインドに於て失敗し、北アメリカに於てやはり失敗致しましたことは有名の事でありまして、近年になりまして頻りに骨折りまして、アフリカ經營をやつてをりまするが、骨折りの割合にはイギリス人程の成效を現はしてをりませぬやうな次第でありまして、氣樂に伸びました國民はつまり困苦して登てまゐつた國民の爲めに壓倒せらるゝ運命を有つて居るものであります。尤も氣樂に育ちました人でも、一旦逆境に立ちて直ちに、大に意志を強くし、云氣を振ひ立てまして、困難の間に育つた人よりは遙にえらい人物になるものがまゝあるとまなじやうに、一の國民も自分の境遇を自覺致しまして、大に奮發致しまして働きます時は容易ならぬ國民となり得る次第であります。本邦人などは今申す氣樂に育つた方の内でありまして、是迄はのんきにやつてをつても宜しかつたのであります。今後は大奮發致させぬと他國民の爲めに壓倒せらるゝ憂が

あります。シナ人も左様で至極のんきに育ちました國民であります。我等よりも今一段の奮發を致させぬと、とてもやりきれぬものはあります。かやうな譯であります。低地の自然區域より、例へば山地の自然區域を兼并しやうと勉むることは頗る困難のことでありまして、歴史に現はれました處で見ましても、國民がかかる計畫を致して成功致しました例は乏しうございます。却て往々に山地の小さい國民の爲めに壓倒されてゐます。又島の自然區域より討て出まして、大陸の自然區域を取らうと致すのも甚だ困難のことでありまして、尋常一様の忍耐力などでは兎ても凌げませぬ。ローマがイベリヤ半島を何うして經營致したかを見ると、先づ北のエプロ河の中流にありまする平野、次に南のグアダルキビル河の流域の平野を占領致しまして、此の兩地方より自然の山地を漸々に取りましたとてあります。是は畢竟するところ本國の力が非常に強い爲めに、かやうにわりに小さい低地を根據地と致しまして、大な山地を兼并することを得たのであります。由てローマのイベリヤ經營は除外例に屬する場合であります。かやうに本國の力が強大であります。ぬければ到底小さい低地を根據地と致して、山

地の自然區域を占領することが出来るものではありませぬ。

森、草野

森と申しまするのは、自然に樹木が生へてをりまするものでありまして、人工によりまして植立てましたものを林と申す例であります。即ち人造林と申しまするのは之れのこととあります。人造林の地方は別に申上げる必要もありませんが歴史地理に於て考ふべきものは、數十里、數百里に亘りまして自然に樹木が生えてをる地方のこととあります。かやうなる地方を森の自然區域と申します。又樹木は甚だ少ふござりまして、草が盛に生ひ繁りまする地方があります。處によりますると、樹木は殆んど全く無くて、草ばかりの處があります。尤も地味濕度の如何によりまして、草の盛に繁る處もあれば、實に情けない有様の草が處々だらに生えまする地方もあります。草を以て覆はれる地方を、其の肥へてをると稱せてをるとに拘らず、總稱致してステップ(草野)と申します。かやうな森の自然區域や、草野の自然區域は、大陸でありますねければございませぬ。世界に有名であ

る森の自然區域はロシアの中央部カナダの南部などでありまして、草野の自然區域として有名なのは南ロシアよりシベリアの南部にかけましての地方、合衆國の北の中央部即ち昔のプレーリー地方、アルヘンチナ共和國の内地、即ちパンパス地方などでありまして、是等は何れも皆、木と申し草と申し、申し分のない結構な性質のものが大地方を覆ふてをる場合とあります。之に反して中アジアのステップ、モンゴリアのステップなどは、極めて情けない草が雨の降りました後に發生致すと申すやうな處で、草野といえば言はれぬことはありませぬが、極めて情けない草野であります。殆んど砂漠に近いものであります。

森の自然區域は人民の運動に莫大の阻害を與ふるものでありまして、原始國家ならばいざ知らず、稍進歩致しました國民が、かやうな自然區域によらう居らう等がありません。原始國家の國民は、もともと人口は至つて少いし、防禦力も極めて乏しいこととあります。かやうな森の中などは、かねて申上げますとほり、自然に完全の防備ある譯であります。彼等原始國家の國民が居住致しますには、極めて都合のよい自然區域であるのであります。さればこそ歴史にあらはれて

ひまする原始國家も往々森の中に置いてありましたし、又今日現に見受けまする
 アフリカ内地の原始國家も往々森の中にあります。かやうな原始國家の國民
 は、森の中に狩りくらを致しまして、野獸を取り、木の實を集め、或は木のうつろにあ
 りまする蜜蜂をさがし取り、又は、腐木の中に居る虫類をほり出しなど致しまして、
 其等を食物に致しまして、僅かに其の口其の口を送る次第であります。とても
 人口が増したり、物産が起つたり政す筈はないのであります。まして文物などが
 かやうな境遇に於て起る筈は万々無いのであります。それですから大國家が森
 の中に生ひ立つ譯はありません。古のゲルマニ、古のスラブは、何れも皆森の中
 原始國家を造つてをりましたが、彼等が大國家をつくりましたのは森の中ではな
 いので、森を出てまして他の性質の自然區域に移住致して、其の行先き行先きに於
 きまして大國家をつくりましたのであります。現にシナの清朝も此適例でありま
 す。されば森の自然區域は柘殖の上にをきまして年代の尤も下ることでありまし
 て、御承知の通り、ロシア帝國は近年になりましてから森を切り開きまして、盛んに柘
 殖致してをる、次第であるのであります。スウェーデンもさやうでありまして、北

の部分には森の自然區域であります。其の柘殖は、極めて新しいことでありまし
 て、此國は其の南部に於て、現はれたのであります。今日も同じ姿でありまして、
 スウェーデンの人口は、主に南部にあります。

草野の自然區域は、既に低地の處に於て申しました通りにもともと其の性質
 が低地であります。凡て低地の規則に従ふこととあります。又、地味の善し
 惡し湿度の過不及によりまして、草のてき工合が違ひますが、草のてきの良いと
 ころは、兎に角色々の種族が入り亂れまして、格闘致します。修羅場となり勝ちで
 あります。さもなければ、附近の自然區域の住民に占領せられまして、穀物の産地と
 なつてしまふのであります。又、草のてきが甚だ悪い處ならば、附近の自然區域
 の人が強てよだれを流すほどにも欲しく思ひませぬので、多くは侵略の災ひを免
 るゝこととあります。何時迄も遊牧種族が僅かばかりの草をたのみに其日を送
 り行くこととあります。何時までたちましても、えらい國家が此の内に發生致
 す氣使ひはござりませぬ。尤も此の遊牧種族が、他の自然區域を知りましてそれ
 を占領しやうとして、本國より打て出でまして、行先きに於て大國家を造りまする

62
399

歴史地理學 完

ならば格別のことであります。トルコに致せ、モンゴルに致せ、オスマン帝國を造り元の大帝國をつくりましたのは、此の場合であります。

二三四

子
孫
の
地
一
分

